

発達に違いのある子どもたち

シリーズ

「それそろ文字の読み書きができるはずなのに」後編

「読む」「書く」が
苦手な子の実際

子どもの立場で
何か困難なのかを考える

1月号では「読む」「書く」メカニズムについてお話ししましたが、実際に「読み書きに困難がある」という場合、どのようなことが起こっているのでしょうか。

例えば小学校の教室で、黒板に先生が書く文章をノートに書き写そうとする時、黒板を見る、広い黒板から目標の文字を探す、ことばのまとまりを記憶する、手元のノートの書くべき場所を見る、記憶したことばのまとまりを鉛筆で書く、同時に先生が話していることを聞く、黒板に視線を移し次のことばのまとまりを記憶する…実際はこの中に、隣の子が書く音、隣の教室の先生の大きな声、椅子を引く音などの多種多様な情報が飛び交っています。そのような中でも目の前の必要なことのみに注意を向け続けられる子どもも沢山いると思います。

しかし同じ教室の中の数人は、この一連の流れのどこかに困難があることから、つまずき戸惑う間に周囲はどんどん進み、今自分は一体何をやっているのかわからなくなり、そのうち先生に注意されるという状況になるのではないでしょうか。

必要な配慮の選択

手立てを講じるために
必要な情報

前述したことは、あくまで板書の場面のみの例えです。実際にはこのようないことが学校にいる間何度も起ることで、注意力を使い果たし疲れ果て、眠くなることもあります。まずは子どもに関わる周囲の人たちが、お子さんのつまずきに気づき、わざとではない、ふざけてなんかいないということを理解してください。中には、うまくいかないことが多いですが、解決の術がなく、おちやらけてごまかそうとする子どももいます。そうしないと、周囲から置いてけぼりにされて孤独になっていくのですから。

子ども一人一人の困難な部分に気づけば、必然的に配慮することは見え得ます。子どもが「読み書き」につながる部屋の両端には日付や係の名前などの記載、その外側にはたくさんの掲示物、教室の広範囲が見える場所では黒板の必要な部分に注意を向けるだけで困難です。書かれた文字を記憶する時、もともと「レクシコン（脳の辞書）」が未熟な子どもは、単語や文節、短文単位で記憶するのではなく、一文字一文字を記憶しようとします。もちろんそれでは内容理解までは難しいです。なんとか文字を記憶し、手元のノートの書くべき場所を探す、視覚機能（眼球運動、視覚認知も含む）の未熟な子どもは、その時違う場所に書いてしまっていません。記憶そのものが弱い子どもは、黒板からノートに視線を移した時点で、何を書こうとしたのかを忘れてしまいます。文字の習得が困難な子どもは、黒板と同じ文字を書くことに必死になってしまい、授業の理解までは難しい、感覚敏感の強い子どもは、周囲の多すぎる音や目に入るものや臭いに惑わされ、授業どころではない…このような子どもが巨大化し、自然な文字が書けなくなつたという報告もありました。

追記

3月は卒業式の季節です。吃音や場面緘默などがあり、点呼やお別れのことばを言う際に声が出ない子どもがいます。無理強いや排除などの不当な扱いは「差別」にあたります。全ての子ども達にとって、良き思い出となる卒業式になることを願っています。

